

〇□△× `同志社スピリット、って？

講演	上林 順一郎〔かんばやし・じゅんいちろう〕
講師紹介	日本キリスト教団松山教会牧師

皆さん、おはようございます。ご紹介いただきました日本キリスト教団松山教会の牧師をしている上林順一郎です。

今朝起きて見事な秋晴れだったので、泊まっていたホテルから同志社大学まで御所の中を抜けて歩いてきました。思い返すと５０年余り前、当時は同級生だった妻とよく御所の中を散歩したこと、芝生に座ってランチを食べたことなど、「我が青春の日々」を懐かしく思い出しながら同志社に来ました。

同志社の正門から入ると正面に「良心碑」が建っています。「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ」。新島襄が残した言葉であり、同志社精神のシンボルとも言えるものです。その前にしばらく立ち、今日お話しする「同志社スピリット」のことを改めて考えながらこの教室にやって来たところです。しばらくの時間、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

「同志社スピリット」とは何か。いろいろ考えたのですが、なかなか難しいですね。あまりよい考えも出ませんでした。とりあえず「〇□△× `同志社スピリット、って？」という題で話をしてみたいと思います。最初に歌を一つ紹介します。

青春という字を書いて

「青春という字を書いて 横線の多いことのみ なぜか気になる」。これは俵万智という歌人の歌です。俵万智さんは早稲田大学の卒業生ですが、学生時代からすでに歌人としてかなり名の知れた方でした。その彼女が最初に出した歌集が『サラダ記念日』（河出書房新社 １９８７年）です。この歌集はすごく評判になりました。斬新で、若者らしい言葉遣いやテーマが多く、これまでの歌の形にとらわれないということもあって評判になり、歌人「俵万智」の名前が広く知られるようになりました。

この歌集『サラダ記念日』の中にこんな歌もあります。「万智ちゃんを 先生と呼ぶ子がいて 神奈川県立橋本高校」。こういうのは歌と言えるのでしょうか。「万智ちゃん」とは俵万智さんのことですが、彼女は当時、神奈川県立橋本高校の国語の教師をしていました。生徒たちからは「先生、先生」と呼ばれていたのでしょう。それはまあ、いいのですが、歌の中に自分の勤めている神奈川県立橋本高校という名前を出して詠んでいる、こういう型破りと言いますか、ルールにとらわれないで自分の思いをそのまま言葉にしている歌、そういう作風が多くの人を驚かせたのです。

これなら私でも作れそうな気がします。「順ちゃんを（私は順一郎という名前です）先生と呼ぶ子がいて 日本キリスト教団松山教会（字余り）」。「歌の才能がありませんから、真似をしてもこんな程度です。俵万智さんはもちろん、ちゃんと大学で歌の勉強をした人ですが、彼女の作った歌にはこのような自由奔放なものも多いです。

ところで、先ほどの歌、「青春という字を書いて 横線の多いことのみ なぜか気になる」。皆さん、ノートに「青春」という漢字を書いてみてください。この「青春」という漢字を見ても、皆さんならどんなことをイメージしますか。

「青春」は青い春と書きますからまず春のイメージ、人生の春の時代を思い浮かべる人もあるでしょう。青という字は若々しさ、みずみずしさ、あるいは今日の青空のような澄んだ清らかさを思い浮かべる人もあるかもしれません。今日の私のように御所を歩きながら、５０年以上も昔の同志社の学生であった頃の青春の日々を思い起こす人もいるでしょうね。言葉というのは、字を一つ取り上げていろいろなイメージや思い出を生み出すものなのです。

さて、俵万智さんは青春という字を、多分じーっと見ていたのでしょうね。「青春という字は、なんと横の線の多い字だ」ということに気が付いた。そして気が付いただけではなくてそれを歌に詠みあげたのです。詩人というのはやはり私たちとは違った感性、感覚をもっているのですね。確かに、青春という漢字を見てみると横の線が多いです。何本あるか数えてみましょう。青の字には横の線が６本あります。春の字も同じく６本、合計１２本あります。「青春」という漢字には横の線が１２本ある。確かに横線が多い漢字ですね。さすが俵万智さん、「青春という字を書いて横線の多いことのみなぜか気になる」、この「なぜか気になる」というところが面白いですね。横線が１２本もある、そんな事実を書いているのではなく、横線の多いことがなんだか知らないけれど、とても気になって仕方がないとの気持ちを歌っているのでしょう。では、なぜ横線が多いのが気になるのでしょうか。

私はこの歌を詠んで自分なりに考えてみました。この「青春」という字を眺めてみると、確かに横線が１２本ありますが、その横の線を支えている縦の線があります。まず青の字の３本の横の線を支えている１本の縦の線、そして春の字の横の線を支えているのが「人」という字です。

ちょっとお遊びですが、青の１本の縦の線を消してみますと「三月」という字になりますね。次に、春の字から人の字を消してみると「三日」になります。青春という字から縦の線を取り除くと「三月三日」になる。もしかしたら青春というのは、三カ月と三日くらいの短さで、あっと言う間に過ぎ去ってしまう日々だということかもしれません。

タテからヨコへ

青春という字に横の線が多いのは、実は青春というのはヨコヘヨコへと広がっていく時代だということを、もしかしたら皆さんは言いたいのかもかもしれません。私自身はそのように理解したいのです。私たちは生まれてすぐに自分のいのちや日々の歩みを支えてくれるものに会います。それはまず私たちの親です。この親とのつながり、すなわちタテの線が私たちを支えてくれるのです。そして小学校、中学校へと成長していくなかで、両親はもとより学校の先生というタテの関係の中で育っていきます。タテの関係に生きる時代ですね。

ところが、ある時期から私たちはタテのつながりから次第にヨコとの関係の中で生きていくようになります。友人、恋人、仲間との出会いと交流の中でより多くの時間を過ごすようになります。そこで人生観やものの見方、価値観を得ていきます。言わば、タテの関係からヨコの関係へと広がっていくのが青春時代と言えるのです。

このヨコの関係が強まってくると、当然のようにこれまでのタテの関係は薄くなっていきます。場合によってはタテの関係が煩わしくなったり、嫌になったりすることにもなります。いわゆる反抗期と呼ばれる時期を迎えることになるのです。

私には３人の子どもがいますが、それぞれに反抗期と言うか、親から離れていく時期がありました。彼らにとっては、親や教師などこれまで自分を支え、守り、導いてきたタテの関係より、友だちや仲間といったヨコのつながり、そっちの方がもっと大切に思えるようになっていきます。両親や学校の教師や社会の大人たちへの批判や反抗は、むしろヨコへの人間関係の強まりであると言えるのです。

青春というのは、その意味ではそれまで強く結び合っていたタテの関係、親や教師や会社の上司から離脱していき、さらには社会の規範やルールという自分を拘束するようなタテの関係からも自由になって、ヨコの関係、友だち、恋人、仲間、そういう人々とのつながりや関係と強く結び合っていくとする時だと言えるのです。ヨコの線が１２本もあるのは、ヨコへの広がり、ヨコとの関係を深め、強めていくという青春の時代の姿を現しているのです。

さて、青春の１２本の横の線は１本の縦の線と、それからもう一つ、「人」という字で支えられていると言いました。青春とは確かにヨコヘヨコへと広がっていく時期であり、新しい人や出来事との出会いを経験する時でもあります。

では、どのような人や出来事との出会いがそこで起こるのでしょうか。まず「青」の縦の１本の線ですが、アルファベットの「I」と読めます。すなわち「私」です。友だちや仲間や恋人やいろいろな人たちに会おうというのが青春の時代であると言いました。しかし実は、青春時代で一番大切な出会いは「私」との出会いなのです。「私」との出会いがなければ、ヨコとの出会いは本当の出会いにはならないのです。「私」、すなわち「自己」との出会い、「私は一体何者なのか」「本当の自分はどれなのか」、こうした問いにぶつかるのが青春時代でもあるのです。

自分と出会い、そして本来の自分の発見が青春時代で一番大切な出会いです。「自分探し」という言葉がありますが、本当の自分、真実の自分を探し求め、発見する。この自己との出会いと発見のことを、英語では「アイデンティティ」と言います。日本語では「自己確立」とか「自己同一性」などと訳しますが、自分は自分であり、そして自分らしく生きること、それが青春と言ってよいのです。「アイデンティティ」の獲得、それはまず自分との真剣な出会い、そして葛藤、時には自己への絶望などを経て獲得していくのが、「私」だということです。

アイデンティティ、ウィデンティティ、そして・・・

私は４０年余り東京の早稲田教会の牧師をしていました。早稲田大学のすぐ近くにある教会です。その間、早稲田の学生たちと仲良くしてきました。もともと早稲田と同志社は関係が深い学校ですし、似ている所もあるのです。早稲田は自立心の強い学生が多く、個性の強い学生も多くいて、好きな大学ではあります。しかし、そんな大学でも時代と共に変わってきました。たとえば、入学式や卒業式の光景です。入学式にはいつの頃からかお母さんがついて来るようになりましたね。そのうちにお父さんも一緒について来るようになりました。子どもの入学式や卒業式に両親がついて来る。ほほえましい光景と言えなくもありませんが、最近はさらにおばあちゃんも一緒にやって来る。学生１人に親２人、それにおばあちゃんも一緒。同志社ではどうですか。たぶん同じような光景が見られるでしょうね。家族みんなが喜んでくれるのは分らないくはないですが、最近は入社式もお母さんがついて来るという話も聞きます。別に悪いと言っているのではないのですが、自分の入学式や卒業式でしょう。「いい歳して、お前のアイデンティティはどうなっているんだ」と、つい思ってしまうのです。

アイデンティティ（自己確立）がなかなかできない、その理由の一つは「人との出会い」の少なさです。アイデンティティは自分一人だけでは生まれてこない。どれだけたくさんの人に出会い、どれだけたくさんの人とぶつかり、どれだけたくさんの人から学んでいくか、言わば他者との出会い、これが青春におけるヨコの広がりなことなのです。そのことをなくして、青春はただの「三カ月三日」になりかねないのです。

野村祐之先生（青山学院大学非常勤講師）はアメリカで肝臓の生体移植を受けた方ですが、手術後自分の体の中に他人の肝臓が移植されたことによって生かされていると知った時、「他者（あなた）」と共に生きている、いや、「他者（あなた）」によって生かされていると感じたそうです。それを「ウィ（We）デンティティ」と呼び、「アイデンティティが崩れてきて、その所から一緒に生きるウィデンティティが出てくるのです」と書いておられます。アイデンティティは大切なことです。「私」の確立はなくてはなりません。しかし、

「私」は他者（あなた）と共に生きるということにおいて確立されていくのです。他者と出会い、触れ合い、時には対立したり、離反したりすることを通して、他者（あなた）と共に生きること、すなわち「ウィデンティティ」となり、初めて「アイデンティティ」が確立されていくのです。野村さんは、それを「アイ（愛）デンティティ」と実に見事に言いかけています。

 俄万智さんが青春という字の横の線が「なぜか気になる」と詠んだその言葉には、ウィデンティティに生きることへの思いがあったのではないかと考えているのです。

 さて、青春とは「アイデンティティ」から「ウィデンティティ」へと進むことであると言いましたが、さらにもう一つの大切な出会いについて考えたいと思います。もう一度、「I」のタテの線を見てみます。このタテの線、両親や上司や教師のタテの線だけではなく、もう一つ私たちがタテの線で結ばれているものがあるのではないかと。それは垂直の線とも呼ぶことのできるタテの関係があるということです。それは何か。神との関係です。神との出会いです。

 私は今から60年近く前に同志社大学の神学部に入學しました。当時のキャンパスはこんな立派な建物などない時代でした。私たちは神学館、いまのクラーク記念館ですね、そこで授業を受けていました。当時の男子学生の多くは詰襟の学生服を着ていました。その学生服の襟のところに学部ローマ字の徽章をつけていたのです。文学部はL、リタレイチャーのLです。経済学部はE、工学部はTだったと思います。それでどの学部の学生かが分かります。神学部の学生もつけていましたが、徽章はDの文字です。これは何の略かと言いますとDivinityの頭文字です。英語で神学部はDepartment of Divinityと言ったと思いますが、DivinityとはDivineという言葉、「神の」とか、「神聖な」という意味がきいた言葉です。学生服の襟のDの徽章をつけていると「あいつは神学部の学生だ」と分かるわけです。それが嫌でつける人は少なかったのです。今思えばこのDはDoshishaのDを表わしていると言えるかもしれませんが、とにかくD（ディビニティ）、それが神学部の学生のアイデンティティだったのです。

 人生の中で人はまず自分自身と出会い、そして他者と出会う。そうした出会いこそが青春の時であり、青春の姿であると言いました。実はそれに加えて、もう一つの出会いをしてほしいと願っているのです。それは神との出会いです。神と呼ばなくても別にかまいませんが、自分を越えた存在との出会いです。人生の中で自分ではどうしようもないという状況に置かれることがあります。時には絶望の淵に沈むようなこともあります。そんな時、私たちを越えた存在、それを神と呼んでいいのですが、その存在を知り、その存在と出会う経験をしてほしいのです。

 神のことをラテン語では「デウス（Deus）」と言います。そのD、ディビニティのDとの出会いです。私たちを越えたもの、人間の世界におさまりきれないような何か、そういう存在を知ること、出会うこと、青春という言葉の中に込められている縦の線、すなわち垂直の線、この垂直の関係を大切なものと考えていただきたいのです。

 世の中には幾つもの大学があります。東大や京大のような国立大学、早稲田や慶應のような有名な私立大学など、それぞれの大学には固有の教育理念や思想があります。どの大学もアイデンティティを明確にし、主張しています。しかし、同志社にはそれらの大学にはないものがあります。それがディビニティです。そしてそれこそが「同志社スピリット」の根幹にあるものだと言えるのです。

 「アイデンティティ」から「ウィデンティティ」へ、そして「ディビニティ」へ。真実な「私」と出会い、共に生きる「あなた」と出会い、そして真の神、デウスに出会う。これこそが青春の意味だと、私は思っています。

同志社スピリットに生きる

 私は東京の早稲田教会の牧師を約40年勤めた後、群馬県の北にある吾妻（あがつま）という山峡にある教会の牧師となりました。その教会は小さな教会でしたが、120年以上の長い歴史をもっていました。その教会を建てたのは山口六平というその村に住んでいた信徒さんでした。彼は若い頃、一人のクリスチャンと出会い、洗礼を受けクリスチャンになります。その人物とは海老名弾正という人です。海老名は熊本県の洋学校で学んでいた時に洗礼を受けてクリスチャンになりますが、その後同志社で学び牧師となった人です。

 先年、NHKの大河ドラマ「八重の桜」で同志社の学生として登場していた人たちの一人です。海老名は同志社を卒業した後、新島襄が故郷の安中に建てた安中教会の牧師となり、さらに前橋教会の牧師などを経て後に同志社の総長になります。その海老名との出会いを通して信仰に入った山口は、郷里吾妻に戻って教会を建てたのです。それが今の吾妻教会です。

 しかし、日本の伝統宗教や因習の強い土地柄であったため、キリスト教に関心を示す人などほとんどいないわけでした。そこで教会が力を入れたのは教育でした。その町の初等学校の教育にかかわったのです。海老名がいた熊本バンドの影響を受けた若者たちが吾妻に来て、教師となり教育に従事したのです。彼らが取り組んだのは「人格教育」、「人間教育」でした。当時の教育は「読み・書き・そろばん」といった実用的なものが多かったのですが、そういう時代に「人間教育」、「人格教育」に力を入れたのです。さらに女子教育にも力を入れました。この当時、女性には学問なんかいらん、勉強なんかする必要はないという風潮が強く、女性はほとんど教育も受けられなかったのです。その女性たちに教育を広めようとしたのです。もちろんキリスト教の伝道活動もしますが、「人間教育」、とりわけ「女子教育」に努めたのです。また、この時代、貧しい生活の犠牲者となったのも女性でした。貧困ゆえに身を売る女性もいました。そうした女性の置かれている状況を解決するための「廃娼運動」を行うのです。群馬ではこんな田舎からそうした運動が始まったのです。明治期にこうした活動をした歴史が吾妻教会にはあったのです。

 群馬県には幼稚園の子でも知っている「上毛かるた」というのがあります。最近、「地域かるた」や「郷土かるた」が流行っているようですが、「上毛かるた」の上毛というのは群馬県のことですが、群馬県人ならこのかるたはほとんどの人が知っています。この「上毛かるた」の中に9人の人物が登場するのですが、その内2人がクリスチャンです。一人は内村鑑三で、もう一人が新島襄です。内村鑑三は高崎藩士の子で、新島は安中藩士の子で、二人とも東京で生まれたのですが出身は群馬ということになっています。この二人が上毛かるたの中で詠われているのです。内村鑑三のかかるたは「心の燈台 内村鑑三」、新島襄は「平和の使徒（つかい） 新島襄」です。群馬ではキリスト教と言うと「内村鑑三と新島襄のキリスト教ですか」と言われるぐらい有名なです。

 キリスト教でもいろいろな派のキリスト教があります。中にはキリスト教の新興宗教やキリスト教とは言えないのにキリスト教と名乗っているものもありますが、群馬ではキリスト教と言うと「内村鑑三のキリスト教、新島襄のキリスト教」として受け止められているのです。内村鑑三は「無教会」を始めた人ですが、教育勅語に拝礼をしなかったということで非難や中傷を受けますが、自分の心、良心と言ってもよいと思いますが、自分の良心を貫いて生きた人です。新島襄は「平和の使徒」として世界の平和と国際交流のために尽くしたとして人々には受け入れられているのです。

 群馬でも「キリスト教の教えは難しいですね」と、よく言われました。そんな時は「いや、私たちのキリスト教は、内村鑑三さんの心の燈台や新島襄さんの平和を教えることです」と言うのと、皆さん分かったような顔をされることが多かったのです。先ほど言ったようにキリスト教は「人格教育」、特に「女子教育」の先駆けとなったからです。特に廃娼運動による女性の解放に力を尽くしましたし、海老名弾正より洗礼を受けた後、同志社を出て安中教会牧師となった柏木義円の反戦思想や平和運動などが大きな影響を与えました。群馬県ではそうした人物の働きを通して、キリスト教精神、そして「同志社スピリット」が生きていたのです。

 その後、私は吾妻教会を辞して四国の松山教会に移りました。松山教会も今年で創立130年を迎える歴史のある教会ですが、松山教会を建てたのは二宮邦次郎という人でした。二宮邦次郎は岡山県の備中高梁の生まれで、当時岡山教会の牧師であった金森通倫（この人も熊本バンドで、同志社に行った人です）と出会い、影響を受けて同志社に行きます。そして同志社を出て後、岡山に帰り郷里の高梁で教会の創設に寄与します。新島襄から洗礼を受け、新島襄の教えを受けた1人でもあります。

 この二宮邦次郎が松山教会を建てたのは、1885年のことです。彼はその翌年に四国で最初の女学校を創設します。これが松山にある「東雲（しのめ）学園」というキリスト教主義の女子の学園です。当時、松山でも女性にはほとんど教育の機会をもつことができませんでした。小学校を卒業すると家庭に入るか、「子守や女中さん」として奉公に行くかで、教育を受ける機会などほとんどありませんでした。二宮は「女子も教育を受けるべきだ」と主張して女子教育のための女学校を建てたのです。さらにその翌々年、彼は町の中にたくさん未就学児童がいることを知ります。家庭が貧しいゆえに働かざるをえなかったり、中には物乞いをしている子どもたちがたくさんいることに二宮は気が付き、夜学校をつくります。これが四国で最初の夜間の学校で、今の「松山城南高校」の前身です。これもキリスト教主義の学校です。二宮は教会を建てただけでなく、四国で最初の女学校をつくり、また最初の夜学校をつくったのです。彼は牧師であり、教育に力を注いだ人であり、さらに四国で最初のキリスト教の教諭師（刑務所に行つて収監されている人々に話をする働き）もしたのです。

 つまり、二宮は、新島襄から洗礼を受け、牧師として活動しただけではなく、学校教育、社会福祉、刑務所伝道など多様な働きに従事した人です。その多くが四国で最初の活動です。こうしたフロンティア精神、時代に先駆けた働き、これが同志社スピリットであろうかと思います。

ディビニティ

 今「あさが来た」というNHKの朝の連続テレビ小説が放映中ですが、この主人公の女性は京都の豪商の家に生まれ、大阪の両替商に嫁いだ広岡浅子という女性です。彼女は小さい頃からお蔭で、男の子と相撲をとったりする自由人と言えますが、いつも口癖は「女はどうして勉強したらあかんのや」、「女はどうしてモノみたいににお嫁にもらわれていくのや」という疑問や批判をもつ女性でした。時代は幕末の激動期です。大阪商人の多くが商売に失敗していく中で、彼女は九州の炭鉱を買って経営をしたり、大阪で初めて保険会社をつくったりします。女傑と言われた女性ですが、後にクリスチャンになります。それはある一人の人物との出会いがあったからです。その人とは成瀬仁蔵です。成瀬は大阪の浪花教会の牧師であった澤山保羅（ぼろ）から洗礼を受け牧師になった人ですが、澤山が進めていた女子教育に協力し、大阪で最初の女学校、現在の梅花学園を創立し、その初代の校長になります。しかし、成瀬はどうしても女子の高等教育が必要だと考え、東京で大学をつくらうとします。当時、女子のための大学をつくるという主張に賛同する人はほとんどおらず、女子大の創立は並大抵のことではありませんでした。その時に資金協力をしたのが広岡浅子でした。もともと子どものころから「女はどうして勉強したらあかんのや」と言っていた広岡浅子はこの成瀬仁蔵の考えに共感し、特に彼の人格、人間性に心酔するのです。もう一も二もなく、「成瀬先生、私、協力します」と言って、多額の資金を提供したのです。これが今の日本女子大学、私学で最初の女子大学です。その創立に尽力したのが成瀬仁蔵と広岡浅子でした。

 広岡は成瀬に出会ってキリスト教に深く心惹かれるようになり、大阪教会の宮川経輝（つねてる）牧師より洗礼を受けてクリスチャンとなります。その後、彼女は生涯の師と仰ぐ人物に出会います。それが山室軍平です。同志社の神学部で学び、後に救世軍を創設し、指導者となった人です。宮川経輝も同志社の出身です。広岡浅子は同志社との直接の関係はありませんでしたが、同志社の精神を引き継いでいる人々との出会い、その信仰の影響を受けた人であったのです。

 広岡浅子の書いた文章に「自分の一生を振り返って私が何よりも意味深かったのは、大切だったのは、神さまと出会ったことだ」とあります。これが「ディビニティ」です。彼女はアイデンティティの確立した女性でした。また、多くの人々との出会いで成長していきます。そして最後に神と出会ったのです。彼女は実業家として金儲けをし、資産家になるのですが、晩年はそんなものはおもてない、とすべての事業から手を引きます。そして女性の教育の活動に邁進するのです。また、彼女がもう一つ行ったのが「廃娼運動」です。女性が金で買われ、男の客のために体を売る、そういう悲惨なところに置かれている女性たちのために行動したのです。そうした彼女の行動の背後には一番大切だったこと、「神さまとの出

会い」があったのですね。

ここまでお話しした人々はいずれも過去の人たちです。でもその人たちの中に流れていたのは新島の精神、新島の信仰であり、「同志社スピリット」だと言えるのではないしょうか。慶應の福沢諭吉は66歳、早稲田の大隈重信は84歳まで生きましたが、新島襄の人生はわずか47年でした。しかし新島が残したものと、伝えようとしたもの、信仰と教育を通して教えようとしたものは多くの人々によって継がれてきました。そしてこの国の社会を変革し、多くの人々を育ててきたのです。その働きこそが「同志社スピリット」と呼ぶものだと思います。

○□△×・・・

さて、今日の話は一体何なのかと心配する方もいるかもしれませんが、本題に入りましょう。
今日の話の題名は「○□△×」ですが、皆さんはこの四つの図形の中でどれが一番好きですか。まず○を好きな人、手を挙げてみてください。半分より少し多いかな。□を好きな人は、5、6人ですね。では△を好きな人、結構いますね。最後に×を好きな人、これは誰もいないようです。

大体どこで聞いても○を好きな人が多いですね。8割ぐらいは○に手を挙げます。日本では○を好きな人が圧倒的に多いのです。その次は□が多い。△の好きな人は少ないですね。同志社は案外△が多いですね。×に手を挙げる人はどこでもほとんどいません。

ところで「○がなぜ好きなんですか」と聞くと、いろいろな答えが返ってきます。「○は図形としても美しい」、「円満で平和なイメージだ」、「○は永遠を表している」という返事が多いです。中には親指と人差し指で丸を作り「これが（お金のこと）好きです」と言う人もいました。その○なら私も好きですが、いずれにしても○を好きな人が圧倒的に多いです。ところで、△に手を挙げた人が結構たくさんいました。3分の1近い人が挙げていました。今までこの質問をして△にこんなにたくさんの方が手を挙げたのは初めてです。同志社はやはりユニークな学校ですね。でもこれは素晴らしいことだと思います。「なぜ△が好きなのか」と聞きたいですけれども時間がありません。日本では△は、あまりいいイメージがないのです。「三角関係」とか「角がたっている」とか、帳簿では△はマイナスをあらわすので、あまり好きな人がいない。でも考えてみれば、同志社の校章（✚）は△の組み合わせですね。だから皆さん△が好きなのかな。

ところで、×を好きな人はやはり1人もいませんでした。大体どこでもそうです。なぜ×は嫌いなのか。関西では「ベケ」と言いますが、「なんでベケ（×）が嫌いなのか」と聞くと、「試験の答案用紙に×がついたら嫌や」と言う人がいました。「間違うと両手で×の形をしてブーって言われる」、「進入禁止のマークだから」。確かにそれとおりですね。「×（ばつ）は罰に通じるから」と答えた人もいました。やはり×は一般に印象がよくないのです。

ある時、外国人の集まりで同じことを聞いたことがありました。そこでは○は案外少なく、むしろ×が想像以上に多かったのです。×の図形の好きな理由はというと「クロス」と言う人が多かった。クロスというのは交差という意味です。交差点の交差。交差とは人と人が出会う場所です。さらに×を「かける」と読む人もいました。かけるというのは数が倍数になっていきます。ダイナミックな図形と言うのです。

×にはもう一つの意味があります。×、クロスというのには十字架という意味があります。クロス型十字架、エックス型十字架と呼ばれるものです。さらに×はキリストを表す記号でもあります。クリスマスを「Xマス」と書くことがあります、この「エックス」はギリシア語のキリストという言葉の頭文字なのです。ですから「Xマス」と書いて「クリスマス」となるのです。「X」とはキリストのことを表しているのです。

ところで、×以外の三つの図形はいずれも線で囲まれているので安定しています。閉じ込められた形だと言ってもよいかもしれません。その中で×だけが閉じられてないわけですね。どの方向にでも伸びていく、広がっていくことができるのです。決して閉じ込める形ではなく、自由な姿を表わしているのです。

×は時に、戦う姿に見えることもあります。クロスは出会いのことで、人と人との間ではけんかが起こったり、社会との出会いは争いとなることもあります。刀と刀とが切り結んでる姿にも見えます。社会の動きや国家の進む道に切り込み、抵抗する姿とも言えるでしょう。こういうようなものがこの×の形に込められているのではないかと思うのです。

あえて×で生きることへ

これまで「同志社の精神・スピリット」ということを話してきました。「同志社スピリット」に生きた人々はどうのような生き方をしたのか、それは時代の先駆者となる生き方でした。時代の流れに従順に生きる道ではなく、その時代の問題や課題に立ち向かい、それと切り結び、闘っていくという精神でした。

それはキリストが歩まれた道でもあったのです。キリスト教のシンボルである十字架とは、そのような意味をもっているのです。キリストはその時代に丸く収まって生きたのでもありません。□（正方形）の形のように、規則や組織や常識に従いながら生きたのでもない。ちょっと角を尖らせていたけれど、結局は社会を変革することもできず、不平分子として生涯を送ったわけでもないのです。キリストの十字架はまさしく×（罰）なんです。巨大な帝国ローマの支配するユダヤの地で、軍勢力や経済力を盾に人々を支配し、力づくで統治しようとしたローマの国家体制に対して、イエス・キリストは「神の国」の到来を告げ、その実現を示そうとしたのです。それは、差別されたり、抑圧されている人々を受け入れ、その時代を支配している差別と抑圧に対して戦う行動であり、正義と平和を実現するための祈りであったのです。その歩みの結果が十字架の上での死でありました。ローマの法律のもとの死刑であり、ユダヤ人からも見捨てられての死、であったのです。まさに、×（罰）を生きた方だったのです。しかし、その×なるキリストによって私たちは「アイデンティティ」を見いだすことができ、「ウィデンティティ」に生きることへと促され、「ディビニティ」との出会いが許されるのです。同志社スピリットとは、×に生きる、まさにこのことではないでしょうか。

最後にこの夏に読んだ1冊の本を紹介します。渡部良三さんという歌人の『小さな抵抗』という歌集です（岩波書店 2011年）。渡部さんは無教会派のクリスチャンです。先ほど話した内村鑑三の作ったクリスチャンのグループです。彼は中央大学の学生の時、学徒出陣（学生のまま徴兵され戦場に送られること）で中国の河北省に行きます。彼は学生ですから戦争など全く経験のない新兵です。人を殺すことなど一度も経験がありません。しかし、戦場では人を殺さなければなりません。そのために古参兵が人間を殺す訓練をさせるのです。どんな訓練かと言うと、捕虜の5名の中国人を学生たちに銃剣で刺し殺すことを命じるのです。学生は銃剣で目の前に跪いている捕虜を一人ずつ銃剣で突き刺すのです。初めての経験ですから、1度で刺し殺すことなどできるわけはありません。何度も何度も中国人を刺すのです。死ぬまで刺すのです。そういう訓練をして学生たちを戦場に向かわせる、それが戦争の姿です。

渡部さんの番が回ってきました。彼は銃剣を手にして捕虜を刺そうとするのですが、どうしても刺せない。その時、秋田駅のホームで出征を見送っていたお父さんから言われた「もしお前がどうしても悩んで決断できないようなことがあったら神さまに祈りなさい」という言葉を思い出したのです。お父さんもクリスチャンでした。彼はその言葉を思い出し、祈ります。「神さま、どうすればいいですか。道をお示し下さい。力をお与え下さい」。その時、声が聞こえてきました。「汝、キリストを看よ。虐殺を拒め」。「殺してはならない」。その声を聞いて彼は殺すことを止めるのです。でも、そんなことをしたら上官が許すわけはありません。「お前は何をしたんだ」と、ものすごい暴力、暴行を受けるのが常です。でも彼は捕虜を殺さなかったのです。激しい暴行を受けましたが、彼は殺されることはなく、日本に帰ってくることができました。その戦争の体験を詠ったのがこの歌集です。その中の一つを読みます。「祈れども 踏むべき道はただ一つ 殺さぬことと 心決めたり」。彼がその時に出会ったのは誰だったのか、それは神でした。神の声を聴いたのです。神の前にどう生きるべきかを問われたのです。そして人を殺さないと心に決め、激しいリンチを受けながらも帰国することができました。戦後、歌をもって平和を訴え続けた人であります。

皆さんは今、青春の時を送っています。その日々、どういう自分に出会うのか。どういう友人、仲間に出会うのか。そして神とどのような出会いをするのか。日本はご承知のとおり、集団的自衛権を盾にして戦争のできる国になりつつあります。そうなる、ここにいる皆さんが戦争の当事者になるんです。その時、皆さんは、どのように決断し、どのように行動し、そしてどのように生きていくのが、問われることになるのです。

先日新聞に同志社の卒業式で大谷総長が語られた言葉が採り上げられました。同志社の卒業式の式辞が新聞に大きく採り上げられるのはあまりないことでしょう。大谷先生を存じあげませんけれども、なぜ新聞に採り上げられたのか。大谷先生の式辞での言葉は、このようなものでした。「人にとって大切なのは自由である。その自由は個人主義からくる。個人主義と利己主義とは違う」。個人主義とは今日の言葉で言えば「アイデンティティ」です。私とは何者なのか、私は他者とどう共に生きていくのか。そして、何よりも神の前にどう生きるのか。私はそのように受け止めました。

最後に、渡部良三さんの歌をもう一つ紹介します。「これほどの 数多き若きを死なしめる権力とは何 国家とは何」。これは戦争が終わった時に詠んだ歌です。これほど多くの若い人を死なしめた権力とは一体何なのか、国家というのは一体何なのか、と彼は強い反省を込めて問うているのです。

私は今日ここに来る前に、良心碑の言葉「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ」を見て来ました。これは60年余り前の私の学生時代も、同じ所に建っていました。その時も同志社精神のシンボルだと言われました。まさに同志社のシンボルですけど、ただシンボルであるだけではダメなんです。石の碑として建っているだけではダメなんです。石の碑をご大層に守っているだけでは意味がないのです。問題はスピリットです。それが本当に生きて、働いて、そして人を生かすものとなって、はじめてスピリットとなるのです。結論を言えば、同志社スピリットとは、良心が全身に充滿していることです。その良心とは、単によい心のことではなく立派な心のことでなく、神の前での良心のことなのです。神の前にどのように生きていくべきかを、問い続ける心のことです。

私はこれまでの人生で同志社のスピリットに生きた人々に直接・間接に出会いました。それは私の宝のように大切なものです。そして今皆さんに聞きたいことは、同志社スピリットが青春の時を生きている皆さん一人ひとりの中に充滿しているかどうかということです。石の碑はいずれ崩れ落ちます。でも心の中に充滿しているスピリットは消えません。次の代へと必ず伝えられていきます。新島襄が体現したそのスピリットは多くの人や出来事を通して今に伝えられ、これからも伝えられていくだろうと信じて、私の話を終わらせていただきます。